脱いだり舐めたり食べたり、小劇場の過激な話

岩﨑真紀－文
text: Maki Iwasaki

6月にシアターZOOで上演された札幌座公演『ルル』は、男たちを翻弄し翻弄される美貌の孤児・ルルの物語。札幌座ディレクターの一人である橋口幸絵が演出し、ルル役の坂本祐以（劇団千年王國）は上半身を露わにしてのダンスやベッドシーン、男の股間に顔を寄せての愛撫シーンを披露した。

これを、多感な年頃の子どもと一緒に観てしまった客がいて、後にクレームがあったという。聞いたときは驚いた。小劇場とはそもそも、平穏な日常とは異なるものに出会う可能性を持つ異空間だ。だが、札幌座作品は長くチーフディレクター・斎藤歩が演出してきたので、件の観客は、彼の創る穏やかで優しく、安心して観ることができる世界を期待していたのかもしれない。

この事件は、7月後半からの「札幌演劇シーズン2015-夏」において同じシアターZOOで上演された、実験演劇集団風蝕異人街の作品に影響した。演目は寺山修司脚本をベースとした『青森県のせむし男』で、白塗りの美女が上半身をさらす場面があるのだが、これに配慮が必要では…という意見が出たのだ（札幌演劇シーズンには公的なお金が使われている）。

劇団coyote『愛の顛末』の一場面。パンクを体現するような森田亜樹の演技が光った

演出のこしばきこうは、「脱がずとも作品の世界観は創れる」との判断で、該当場面では美しいビスチェの少女たちを登場させた。だが、観客の多くは寺山修司のエッセンスに惹かれて集まったのだ（たぶん）。寺山の精神に倣い、規範逸脱的な展開になったほうが面白かったのに…というのが、無責任な観客の一人としての感想だ。

上半身のヌードよりも、同じく札幌演劇シーズンで上演されたパインソー『フリッピング』のシモネタのほうがよほど過激だと、私には思える。失禁、顔への放尿、飲尿、食糞などの場面を笑えるのは、刺激に慣れて「もっと！」を求める上級客（？）だろう。私にとってはスパイスのきつすぎる作品だった。

小劇場はひとときの秘密を共有する空間であり、観客が驚き喜ぶ「見世物」を出す空間でもある。その意味ではヌードもスカトロもなんでもアリだ。だが、展開の退屈さの目眩ましや場面の賑やかしとして登場させている作品は、ちょっと驚いても長く記憶はしない。正直、札幌では、ヌードやシモネタが作品にとってどうしても必要なのか、そのことで何を表現したいのかを問いたくなる作品も多いと感じる。

そんな中で、必然性・迫力ともに大満足したのが、女優・森田亜樹が演じたベッドシーンと絶唱だ。作品は2014年11月に上演された、劇団coyote『愛の顛末』。物語の謎の焦点であるパンクな女の、孤独と愛と狂気の炸裂を伝える素晴らしい場面に、演出家・亀井健の美意識を感じた。2016年2月の再演に森田が出演できないのは大変残念。誰がどのように演じるのか、期待して待ちたい。

岩﨑真紀　いわさき・まき　フリーライター。来道した劇作家・演出家への取材をきっかけに、北海道で上演される舞台に興味を持つ。札幌演劇シーズンHPのコラム企画「ゲキカン!」を執筆。札幌劇場祭審査員2014〜2016年（予定）、札幌座【Re:Z】幹事。